

Foxp3⁺ T細胞およびCD4⁺ CD127^{lo} Foxp3⁺ T細胞といった制御性T細胞の phenotypeの割合の上昇が細胞治療後には全例で観察された。その後移植後6ヶ月目には漸減する傾向が全例で観察されたが、1年以上の長期経過後には9例中6例で制御性T細胞 phenotypeの再上昇を認めている。末梢血中の制御性T細胞の臨床的意義については今後更なる検討が必要であるが、まとまった傾向がみられたことは大変興味深い。

E. 結論

- 制御性T細胞を用いた新しい免疫抑制療法を施行した生体肝移植症例10例において、免疫モニタリングを行った。
- Cylex値の測定はウイルス感染への罹患やover immunosuppressionの状態を把握する上で有用なモニタリングとなりうる可能性が示唆された。
- MLR、IFN- γ ELISPOT、抗原特異的CD4⁺CD154⁺ T細胞用いたドナー抗原に対する反応を総合的に判断することで、拒絶反応の予測や免疫抑制の適正化を図れる可能性がある。
- 培養制御性T細胞輸注により末梢血液中の制御性T細胞の割合の増加が観察された。これらは一過性に低下傾向を示した後、再上昇する傾向が観察された。
- 肝移植後はnaïve T細胞の割合は減少し、代わってmemory T細胞が増加する傾向が認められた。
- 今後、長期経過後の免疫抑制剤の減量による変化を観察することで、免疫寛容誘導における免疫モニタリングの有用性について検討することが肝要である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1) 国内

口頭発表 0件
 原著論文による発表 0件
 それ以外（レビュー等）の発表 0件

2) 海外

口頭発表 1件
 原著論文による発表 0件
 それ以外（レビュー等）の発表 0件
 学会発表
 Yamashita K, Goto R, Zaito M, Nagatsu A, Igarashi R, Oura T, Wakayama K, Tsunetoshi Y, Watanabe M, Aoyagi T, Ohta M, Taniguchi M, Furukawa H, Suzuki T, Shimamura T, Todo S. A REAL-TIME IMMUNOLOGICAL MONITORING IN LIVING LIVER TRANSPLANT RECIPIENTS. ESOT and AST Joint Meeting - Transformational Therapies and Diagnostics in Transplantation, Oct 12-14, 2012 Nice, France

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

